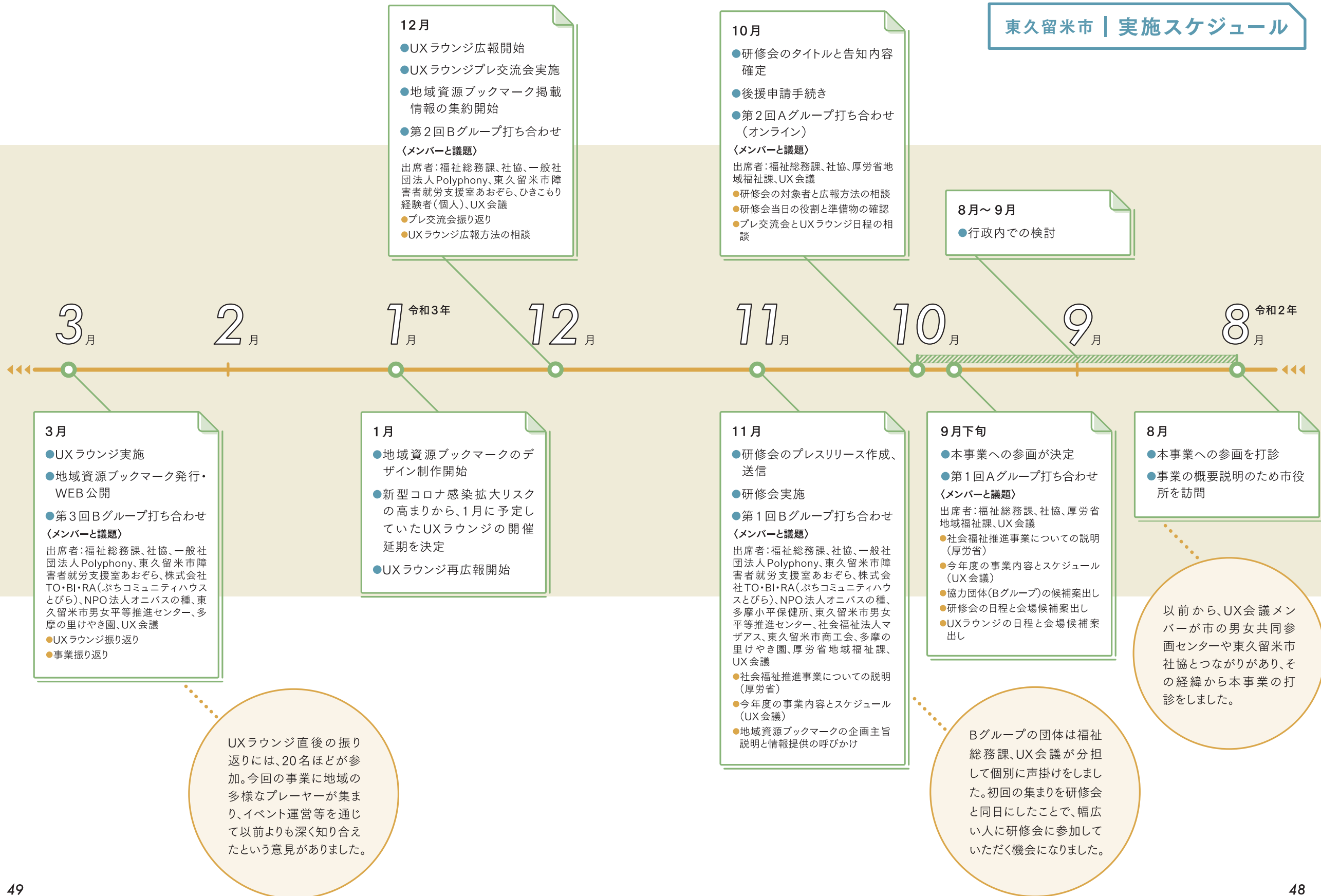


第4章
chapter4

事業のプロセス
—自治体ごとの状況と歩み—

事業の実施にあたって、
どんな人たちが関わり、どう動いてきたのか。
また、どんな難しさがあり、
問題をクリアするために何を工夫したのか。
関係者の声から、
他地域で展開するうえでのヒントを探ります。

東久留米市 | 実施スケジュール



東久留米市 関係者インタビュー

vol. 1



桜井昌紀さん

東久留米市福祉保健部・福祉総務課所属。生活困窮者の自立支援や生活保護など、生活・家族・仕事などの困りごとに対する支援をする中で「ひきこもり支援」にも携わるようになる。

——本事業に参画することになった経緯を教えてください。

桜井さん(以下敬称略)：U×会議の林さんから打診をいただき、ひきこもり支援についていい流れが生まれたらいいなと思って受け

なればよかったなと。

——事業をやったよかったところは？

桜井：市役所内部の人も、外部の人もそうですが、いろんな方ができたのはよかったです。「知ってはいるけど、話したことはなかった」という方とのつながりを太くする機会になりました。社協とは普段からいろいろな情報を共有していますが、今回民間の方と話せて、こういった活動をされているかが分かったので、当事者やご家族のニーズに応じて市役所からご相談できるなと思えました。顔見知りになれて、今後やりやすくなったと感じます。正直「ひきこもり支援って難しい」と思ってしまうところがありました。★それが緩和されました。

東久留米市 関係者インタビュー

vol. 2



時田良枝さん

一般社団法人Polyphony代表理事。2018年、東久留米市内で障害者サービス・生活訓練事業所「リカバリーカレッジ・ポリフォニー」を開所。精神障害や発達障害がある人だけでなく、福祉サービスからこぼれる人が地域で孤立しないための取り組みを実践中。



江連大介さん

東久留米市社会福祉協議会地域福祉コーディネーター。個人への「個別支援」と市内の特定エリアへの「地域支援」を通じて、市民が地域で生きていくための支援を行う。令和2年に「ひきこもり家族会準備会」を立ち上げた。

——お二人は、今回はどんな関わり方をされましたか？

時田さん(以下敬称略)：広報宣伝と、当日のお手伝いを中心ではないので、実際お役に立ったわけではないので、実際お役に立ってかな？ と思います。

江連さん(以下敬称略)：私自身

個別の相談には、地域に出ていきたいのであれば社協につなぐ、というように内容に応じて対応しています。私のいる福祉総務課はその中で、1つのハブになろうとしている部署かなと思います。開始にあたって「うちみたいな、関係者間のネットワークづくりができていない自治体で参加できるのか？」という意見も課内であったのですが、「むしろ土台がない自治体向けで、U×会議さんがいろいろ一緒にやってくれるので…」という話をして進めました。

——事業を進めるうえで、難しかったところは？

桜井：結果的に、みんな議論する場があまり持てなかったというのは心残りです。コロナ禍で集まりづらかったというのがあります。私とU×会議さんだけで進めたところがあったなと。関係者

が集まる機会がもっとあって、会議や打ち合わせで、もう少しそれぞれのできることを活用できたり、意見をもらえる場があればもっと良かったかなと感じます。

——コロナ禍で事業のスタートが延び、機動力頼りになってしまったところはありましたか？

桜井：どこまで呼べばいいのか、という判断基準がなかった。結果的には、ご協力いただいた団体の方々、市役所内、社協、民生委員の方々などにお声をかけました。今回は、すでに知っている方々に声をかけましたが、さらにその方の知っている人に声をかけてもらうということもできたからよかったなと思います。「こういう人もいたんだ」と、知れる機会にも

きました。

——東久留米の皆さんは、もともと民間も含めて関係者同士がお互いをなんとなく知っているという状況だったと思いますが。

江連：そうですね。例えば、ネットワークに福祉分野じゃない商工会さんが入っているのも珍しいこと

阪南市 | 関係団体紹介

case 2
大阪府
阪南市

阪南市
市民福祉課

社会福祉法人
日本ヘレンケラー財団・
地域活動支援センター
まつのき園
障害のある方が憩う交流の場。
精神疾患や発達障害について
も相談できる。

特定非営利活動法人
COCOいこっと
社会参加に不安を抱えている方
たちに、コミュニケーションの場
と学習機会を提供している。

阪南市尾崎公民館
一人で時間を過ごしたり、少人
数で話したいときに利用できる
オープンスペースがある。

大阪府政策企画部
青少年・地域安全室
青少年課

ではないかと思えます。

時田：うちも商工会の会員で、
入った時からひきこもりや生きづ
らさのある人たちの就労について
「障がい者就労だと週20時間以
上働かないといけないけれど、そ
れは厳しい。20時間以下でも、彼
らのペースで社会とつながってい
けるような場が必要」という話を、
事務局長さんにずっと話していた
んです。それを聞いてくださって
「短時間で働ける場づくりをして
いきましょ」という方針で動い
てくださっています。

——そういうことがあったから、
今回も来てくれたんですね。各イ
ベントは実際、実施してみてもど
うでしたか？

時田：研修会は、結構いろんな方
を誘って、普段付き合いのなかっ
た方同士が出会う場になりました

た。やはり「度々集まる機会があ
るって効果があるな」と思いまし
た。これまでも必要な時は話し
ていましたが、度々会うことでお互
いに親しみが持てたと思います。
研修会には福祉総務課以外の部
署からも来てくれたのですが、そ
の後、途切れてしまったのは残念
でした。児童青少年課とか障がい
福祉関係のところとか…。自殺対
策にしても、ある日突然死にたく
なるわけじゃないから、いろんな
ところでキャッチしていく必要が
ありますよね。庁内連携も、もっ
と進めていってほしいとは思いま
す。

江連：本当は、ラウンジなどのイ
ベントも、ひきこもりに限定せず
に、性的マイノリティなども含め
「生きづらさ」をテーマにした場
もよいのではないかと思います。
時田：そうですね。「ひきこもり」っ

て難しいですよ。うちでも、「ポ
リフォニーに毎日来ていて、私は
ひきこもりじゃないのでは…？」
という利用者さんや「うちの子は
ひきこもりではないので」という
親御さんもいます。

——今後の取り組みのイメージ
はありますか？

江連：今回、初めて当事者の方
ち同士の話し合いの場を少しで
すが外から遠目で見させてもら
いました。『to』ではなく『with』
で支援を考えるのが大事という
観点で言えば、我々が関わってい
る当事者の方たちにも、ボラン
ティアで手伝ってもらったり、体
験談を発表してもらったり、そ
ういうことをもっと増やしていけ
たいなと思います。支援の質の
部分、UX会議の林さんのいう
「当事者主体で、横に並んで」とい
うような支援をつくっていきたい

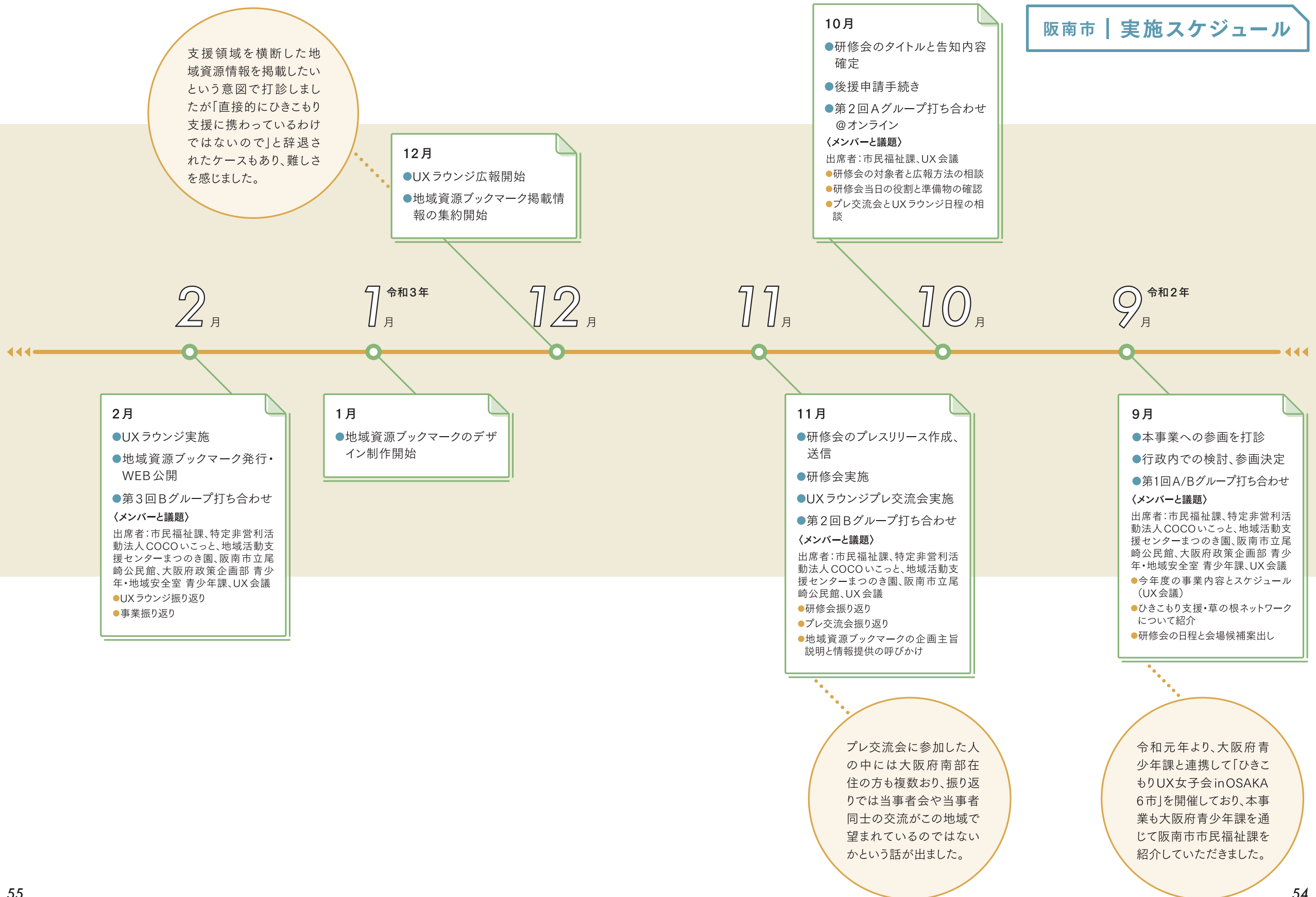
ですね。

時田：支える、支えられるが循環
していくといいですよ。元気に
なってきた人が、次は支える立場
で貢献できる、というような。

江連：今回で、みんな熱くなった
ものはあるので、どこが主体に
なってやるのかですね。実行委員
会みたいなかたちなのか…。あま
りかたちにこだわらずに「私たち
何人かでやろうとなりましたの
で、会場貸してください」と市に
お願いするとか、そういうことか
らでいいのかなと。

時田：社協で支援して下さって
いる家族会も、継続していくと思
うので、そこを基点につながり
を深めつつ、当事者も関わりつつ…
という感じかと思えます。

阪南市 | 実施スケジュール



阪南市 | 関係者インタビュー



ごぼうたに
御坊谷隆さん

阪南市福祉部市民福祉課所属。市民福祉課では「ひきこもり」を含む暮らしの中の困りごとを市役所各部署と連携し、解決に取り組む「くらし丸ごと相談室」を設置している。



梅川昭子さん

特定非営利活動法人「COCOいこっと」代表。以前は就労支援施設で働いていたが、就労移行支援でひきこもり当事者や家族と出会ったことがきっかけで団体を立ち上げた。

——本事業への参画はどのようなスタートしたのですか？

御坊谷さん(以下敬称略)：実は一度、令和元年度の段階で大阪府の青少年課を通じて「ひきこもりUX女子会をやってみませんか？」

とお話をいただいていた。ただ当時、女性の当事者に中心的なメンバーになれそうな方がおらず、お断りさせていただいたんです。その後、令和2年9月に再度連絡をいただいて、今度は女性だけが対象ではなく、広く当事者の

方、家族、支援者の方も対象にできる事業なので、阪南でやってみないかと。今回は私たちの方向性とも合っていたので、ぜひ、となりました。もともと公民館でひきこもり支援実践講座をしたり、講座を修了した方や、経験者の方

と「ひきこもり支援・草の根ネットワーク」という月1回の集まりを持っていたので、そういう活動を広げていくチャンスにもなると思いました。

——梅川さんはいつ頃参画されたのですか？

梅川さん(以下敬称略)：令和2年9月頃ですかね、「こんな話が出てくるんですけど、どうですか？

御坊谷：そうですね、行政単独では意味がないとも思い、梅川さんにお声がけしました。「やりますよね？」という感じになってたかもしれないですけど(笑)

——草の根ネットワークのことをもう少し教えてもらえますか？

梅川：御坊谷さんが声かけしてくださって月1回集まっています。COCOいこっとからは当事者2、3名が参加し、当事者からのひきこもりに関する思いを伝えるのが私たちの役割かなと思っています。当初はご家族の方も何名か来られていたのですが、今は行政の方が多くなっているかなと思います。

梅川：御坊谷さんが声かけしてくださって月1回集まっています。COCOいこっとからは当事者2、3名が参加し、当事者からのひきこもりに関する思いを伝えるのが私たちの役割かなと思っています。当初はご家族の方も何名か来られていたのですが、今は行政の方が多くなっているかなと思います。

梅川：御坊谷さんが声かけしてくださって月1回集まっています。COCOいこっとからは当事者2、3名が参加し、当事者からのひきこもりに関する思いを伝えるのが私たちの役割かなと思っています。当初はご家族の方も何名か来られていたのですが、今は行政の方が多くなっているかなと思います。

——梅川さんと一緒にやれるかな、という感じだったのでしょうか？

御坊谷：令和元年10月から始めたんですが、情報交換と、例えばハローワークの方を招いて出口支

援の話をしていたり、学ぶ機会にもしています。まず当事者の方の話を聞こうということ、COCOいこっとのメンバーにお話してもらおうことも。実は去年(令和2年)の3月に、当事者の声を発信するミニフォーラムを開く予定でした。でも2月からコロナの影響で草の根ネットワーク自体が一時中断してしまっ。3月にやれなかったことが心残り、今回のUX会議さんとの事業は、僕らのやりたかったことと一致していたのでよかったなと思っています。

——この事業でつまづいたり、苦労したところは？

御坊谷：「地域資源ブックマーク」(p.103参照)への掲載を打診したときに、なかなかいい反応をもらえなかった相談機関が一部あ

りました。「こういうものに掲載したいんです」とお伝えした際に、「就労の相談には応じられるけれどもひきこもりの相談のところに掲げられると困る」と言われたり。「いや、就労の面から支援しつつ、難しいというところは別のところにつないでいただければ」とか「生活課題は多様なので、関わり手が多様であるほど、いいネットワークになっていくと思うんです」と趣旨はお伝えしたんですけども。そういうところはちょっと悲しい気持ちになりましたね。また、3、4回電話しても折り返しの返事がなく、これは今の時点では期待ができない窓口かな...と思います。「地域資源ブックマーク」の掲載をあきらめた機関もありました。逆にいうと、一つ一つコンタクトを取って見たことで、ひきこもり支援に関する温度差などが分かったのはよかったです。

安中市 | 関係団体紹介

case 3
群馬県
安中市

安中市
福祉課社会福祉係

ひきこもり相談窓口
ひきこもり支援関係者連絡会
事務局

福祉課障害福祉係
住民福祉課福祉子ども係
子ども課子ども育成係
学校教育課指導係

ぐんま若者
サポートステーション

「働く準備ができる場所」として、働くことに悩みを抱える方を支援している。

Manapal&lims
(マナパルアンドイームズ)
byNPO 法人
国際比較文化研究所

小中学生や保護者からの悩み相談(不登校、発達障害など)を受ける。学習支援や交流の場の提供も。

就労支援施設リベルタ

ひきこもり当事者および障害のある方に就労支援を行なっている。

安中市社会福祉協議会

生活全般に関する悩み、お金に関する困りごとの相談に応じる。

障害者相談支援事業所
ヌア・リーベ

障害のある方が自立して日常生活、社会生活を営むことができるよう相談支援を行う。

ひきこもり支援グループ
ビーイング

当事者やご家族向けに、自立や生活支援、居場所、就労訓練、親同士の月例会など寄り添い型支援を行う。

安中保健福祉事務所

ひきこもり当事者やご家族の支援を行う。

——この事業をやってみての手応えは？

御坊谷：「地域資源ブックマーク」は、おそらく市だけではできなかったものだと思います。でき上がった、今配り歩いてるんですけど、「横の連携を取ろう」というのもなかなかかたちに現れることが少ない中で、完成させることができてよかったです。また、11月に実施した支援者向けの研修会(第2章参照)は、「共生の地域づくり庁内連携推進会議」という、6部15課の研修として位置付けて職員に参加してもらいました。「ひきこもり支援はうちの部の担当じゃないです」という感覚から、「うちの部署には資源がなくとも、対応できる部署につながる」という意識が、芽生えてきているのかなとは思っています。

梅川：U×ラウンジはすごくスタリッシュなイベントになったので、参加した当事者の子にとってすごくモチベーションが上がりましたね。従来のひきこもり支援には、ちょっと「ダサイ」、「暗い」というイメージがあったように思いますが、この会はおしゃれで派手な感じ。規模が大きく、市長や厚労省やいろんな方を巻き込んで進めていく流れが面白いなあと思いました。自分に自信がない状況の中で、「ここに行ってる自分が好き」「これに参加した自分いいな」と思えることでアイデンティティを高めていけるというか。「地域資源ブックマーク」もとてもおしゃれな感じだったので、それを見てCOCOいこつとに相談にきたという人もいます。このイベントがきっかけになって、つながったんです。

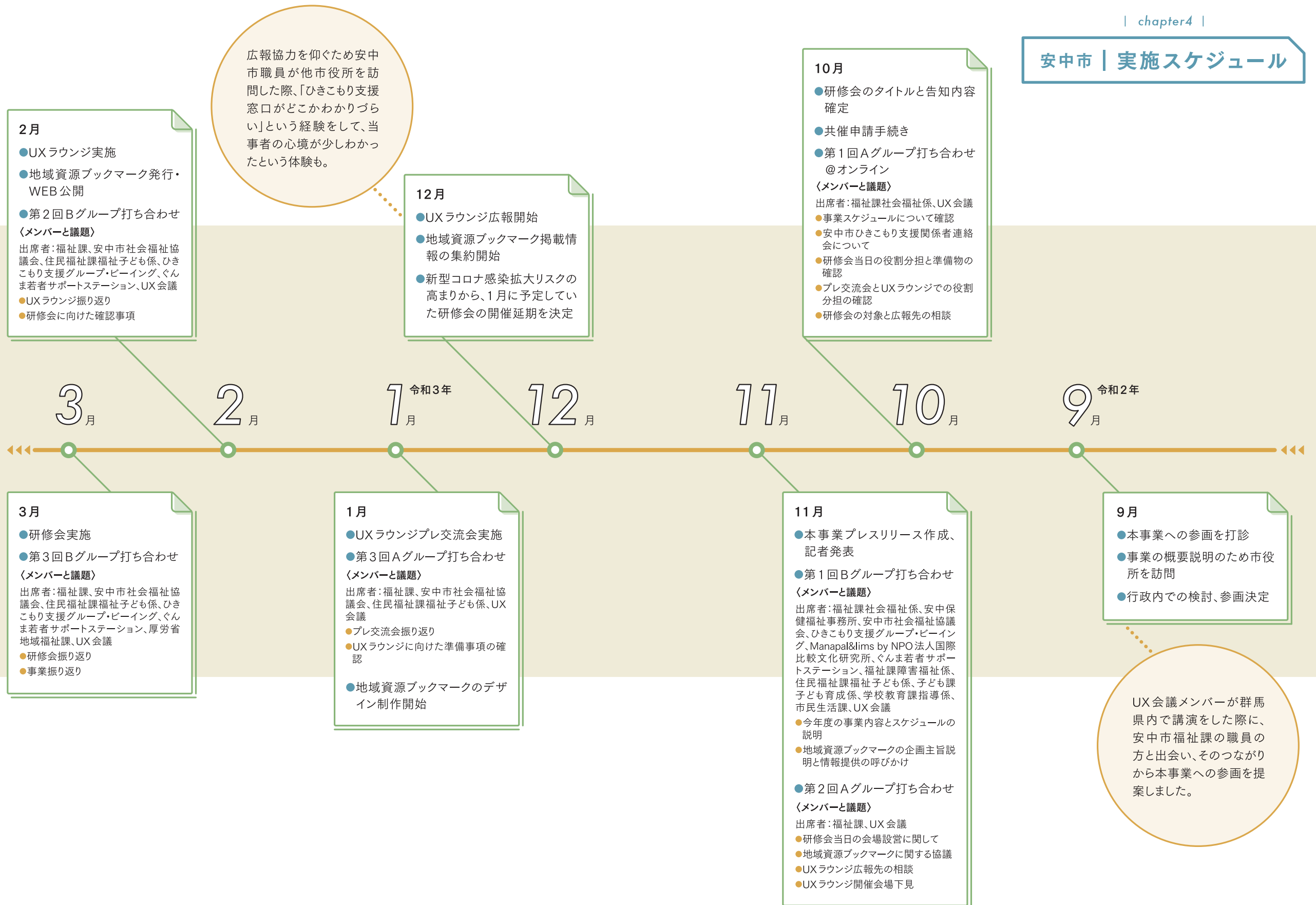
——今後挑戦しようとする他自治体にメッセージを

梅川：私は活動する時、いつも世界中で一人だけにでも光が届けばいいと思っています。たった一人でも、この言葉を聞いて楽になったとか、死のうと思ってたけどここに来て生きようと思うようになった

御坊谷：こちらにも相談が増えていきます。イベントに出たことが改めてきっかけになって、「もう一度相談してみよう」という感じで。窓口に来られた親御さんもおっしゃっていたのは、「市役所に相談するのはハードルが高い」と。やはり梅川さんのやられている居場所のような、ゲームや自由なことがやれて、相談もできる、そういう自然なかたちで自分の気持ちを伝えられる場所が必要なんだなと思いました。

たとか、ほんとに一人だけでいいと思ってやっています。ハードルを低く、とにかくやってみることが大事だと思います。御坊谷：行政の内外を問わず、仲間が3人いれば動いていくんじゃないかと思えます。「一緒にやってくれるよね?」「あなたの言うことなら一緒にやりたいな」という、強い絆の人をつくっていくことかなあと思っています。

安中市 | 実施スケジュール



安中市 | 関係者インタビュー



三宅陽子さん

安中市福祉課社会福祉係所属。平成26年から始まった「ひきこもり支援講演会」の企画や平成28年発足の「ひきこもり支援関係者連絡会」立ち上げにも尽力。市のひきこもり相談窓口として連携や理解促進に努める。



前原彩英子さん

安中市住民福祉課福祉こども係所属。安中市の西側・松井田地区にある支所で保健師として働く。支所に寄せられるさまざまな相談を必要に応じて適切な部署・機関につなぐ役割を担う。

——安中市にはこの事業への参画以前から「ひきこもり支援関係者連絡会」がありますね

三宅さん(以下敬称略)：平成28年7月にひきこもり支援関係者連絡会を立ち上げ、毎年ひきこ

もり支援講演会を開催しました。

秋田県藤里町の菊地まゆみさん※1やジャーナリストの池上正樹さん※2など第一線でひきこもりの支援を実践されている方にお話を聞いてきました。また事例検討会も行ってきました。今回の事

業についてもひきこもり支援関係

者連絡会のメンバーの方の協力は得られると思いましたが、市長も上司も、ひきこもり支援については積極的に進めなさいという方針だったので、始めるにあたっては何の抵抗もありませんでした。

——関係者連絡会の皆さんは今回の事業にはどのように関わったのですか？

三宅：U×会議の方に連絡会に来ていただいて今回の事業の説明と「地域資源ブックマーク」作成について各機関でどのようなひきこもり支援事業をしているかの意見交換を行いました。その後書式にそって活動内容を各機関に記入していただき私のほうで内容を整理しました。連絡会も一緒にこの事業にかかわっている意識を持っていただくために常にメールや回覧で事業についての趣旨をお知らせしていました。

前原さん(以下敬称略)：連絡会に参加の依頼が来れば行っていますので、この事業のことも、「今度こんな大きな団体とやってみようかな」と。「地域資源ブックマ

ーク」をつくっていく作業などは、「普段の業務にも使えるものができるのはありがたい」という気持ちで参加させてもらっていました。

連絡会は、事例検討会など、普段の業務をアップデートしていくような機会になっていて、事例を持っていくと行政だけでなく、民間の方からもいろいろ意見をもらえるので、ありがたい場です。毎回、三宅さんが内容をまとめたものを回覧してくださるので、参加できなかった会でも、こんなことをしたんだな、というのがわかりやすい。支所の中では、私しか参加しないのですが、上司なんかも含めて、その回覧で情報共有ができてるのはとてもいいなと思っています。

——この事業がこれまでと違ったところ、新しいチャレンジだった点は？

三宅：やはり当事者会ですね。これまでなかったのです。ひきこもりU×ラウンジ実施前に安中で開催したプレ交流会でも、「みなさん、下を向いて話し合いにならないかな」なんて思っていたら、すごく和気あいあいとして、一生懸命おしゃべりしている様子を見て、職員みんなでびっくりしました。そのあと、参加者同士で連絡先の交換をしていることにもさらにびっくりで。「ああ、こういうことが、ひきこもっていた人たちがまた意欲が出たり、気持ちの前向きになる要素なんだな」ということをすごく感じました。

前原：私の関わっている人で一人、お誘いして来ていただいたケースがありました。普段買い物と病院ぐらいしか外に出ていない人なんですけど、がんばって来てくれた。ご本人に後日聞くと、「ちょっと

自分とは合わなかったなあ」とはおっしゃってたんですけど、それでもそこに来られたっていうすごいことじゃないですか、と認める機会になれたので、よかったなと思います。

三宅：私の関わってる当事者の人からも「行ってみようかな」という声が出たので、驚きました。当日は来られなかったんですけど。

——今回その方たちが「行ってみようかな？」となったのはなぜなんでしょう？

前原：普段月一回ほど私が顔を見に行っていて、その中で話をして、多少信頼関係ができていたから、というのはあるかと思いますが、それと通所施設なんかだと、一度行ったら通わないといけないというプレッシャーがあって。とりあ

香川県高松市 | 関係団体紹介

case 4
香川県
高松市

香川県
健康福祉部
障害福祉課

KHJ
香川県オリーブの会
ひきこもりの子をもつ親・家族の会。ひきこもり当事者とその親・家族に対して、当事者の自立、家族同士の連携に関する事業を行う。

香川県ひきこもり
地域支援センター
「アンダンテ」
ひきこもり支援専門機関。個別相談、当事者の集団活動、親の会などを実施。

一般社団法人
hito.toco
不登校・ひきこもり等の相談窓口・居場所・就労支援・家族会などを行っている。

ひきこもり経験者
(個人)

高松市健康福祉局
保健所健康づくり推進課
健康福祉総務課
地域共生社会推進室

「前回行ってみると、単発イベントであるということがよかったというのがあるかもしれないです。それから「つらかったら離れていい」「喋りたくないければしゃべらなくていい」という当事者会のスタンスがよかったみたいです。行ってみてダメだったら帰ればいいかなって。」

「前原さんがUxラウンジの振り返りの時に、「行政としてできることってなんだろうって考えちゃいました」っておっしゃっていたのが印象的でした。」

「前原さんイベントの「つながる待合室」のグループワークに参加させてもらって、行政書士さんや就労支援施設の方、県の社協の方々とお話ししました。民間で支援している方は、「どこに相談していいかわからない」って声をいっぱい聞いているそうで、「そうだったんだ」と。うちに来るひとは、相談先を知って来ているわけなので、窓口に来ない人がどう思っているかというのはわからずに今までやって来たんだなあと感じました。」

「今回は会場も高崎市でしたし、広報も近隣自治体と協力して取り組まれたと思います。それ」

「にはどんな意味がありましたか？」

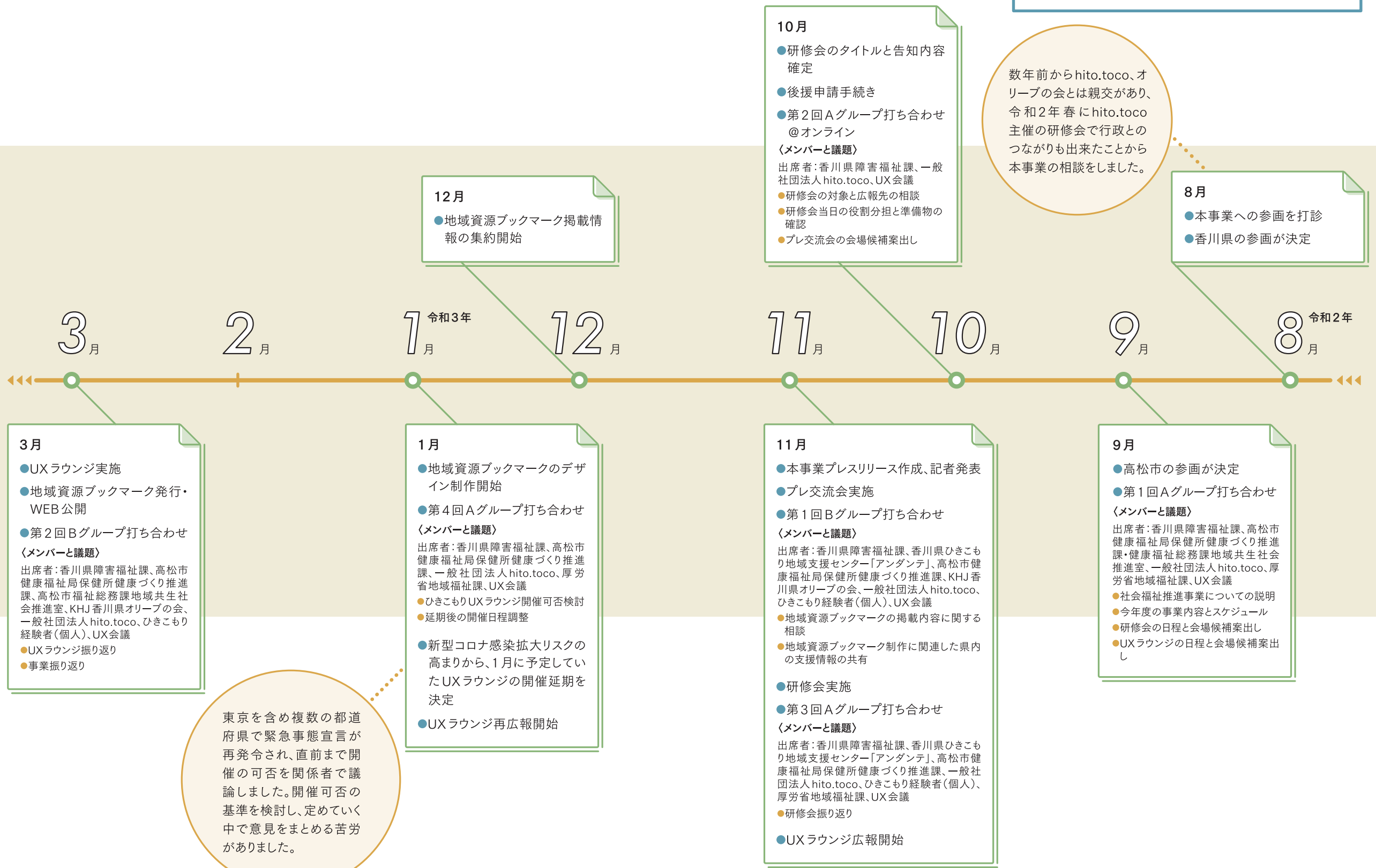
「三宅：高崎市、富岡市、藤岡市などに直接PRに回りましたが、「近隣でそういうことをしてくれるのはありがたい」という感じで、みなさんすごく前向きに受けとめてくださって、広報協力はスムーズに得られました。会場については、単純に地元だけだと人が集まらないですし、むしろ高崎近隣でやるほうが安中市の当事者も参加しやすいのではないかと思います。実際「安中市だと嫌だけど、高崎なら行こうかな」という声もありました。今後も広域でできないかと考えていて、群馬県と県社協と安中市とで、これから話し合いをすることになっていきます。」

「もう次年度に向けて動いているんですね。今後ひきこもり支援」

「の体制づくりをしていく自治体は何かから取り組むのがいいと思いますか？」

「三宅：おそらく担当窓口が決まっていけない自治体もあるかと思いますが、ひきこもりの支援をするのがすごく大変だという認識が強いのかと。担当になると担当者だけが大変な苦勞をしていかなくてはならないというイメージがあると思うのですが、そうではなくて、連絡会みたいなものをつくって、チームとして連携してやっていくといいなと思います。いきなり当事者会はちょっとハードルが高いかな...と思います。研修会は、ゲストをお招きして周知・広報をすればいいという意味では、さほど難しくはないと思います。「家族教室」みたいなものも、比較的やりやすいのではないのでしょうか。」

香川県高松市 | 実施スケジュール



香川県高松市 関係者インタビュー

vol.1



池知美穂さん

高松市健康づくり推進課精神保健係所属。地域保健や精神保健にまつわることを担当する部署。保健師としてこころの健康相談、アルコール依存に関する相談など幅広く対応するなかで、ひきこもり相談も担当。

今回、事業に関わってみていかがでしたか？

池知さん(以下敬称略)：高松で開催したU×ラウンジでは、市内の方の参加が多かったので、高松市ぐらの規模になると、当事者の方も地元だから来づらいいいこととは、そんなになかったのかな、とは思いました。

県内全体のイベントとして実施したので、他の市町からの参加もすんなり受け入れることができました。

市独自で予算を取って実施する事業については、どうしても市内の対象になってしまっていて、高松市民以外の方を受け入れにくいところがあると思います。

こうゆうイベントは初めて？

池知：市民の方向けの講演会はありませんが、当事者会は初めてだったと思います。U×会議の皆さんの、当事者の方との接し方がすごく勉強になりました。終わった後にお話をしフォローされているところも見

て。私たちは、どうしても「仕事として声をかける」感じになってしまいましたが、そういうのとは違って、すごく自然だなと思いました。また、プレ交流会を設定して、当事者の方向けのステップやチャンスを増やそうという発想もなるほどと思いましたね。

今まで高松で当事者会をやるうという話があったのですか？

池知：今、オリーブの会さんに居場所の委託をして隔週で実施していますが、今回のようにイベント的にやるうとは、私自身も思ったことがありませんでした。なんとなく大々的にやるものではないと思っていたところがあります。でも、「やっていたんだな」と分かりました。今回、U×会議の方が進行してくださり、参加者が話しやすいというのはあったと思います。香川の中でも、運営に関わることができると当事者の方がどんどん出てきてくれたら、こういう会も開催しやすいのかなと感じます。

大変だったこと、苦労したことはありますか？

池知：新型コロナの影響ですね。当日、参加される当事者の方がやや少なかったと思います。予約制でなかったらどれくらいの方に来ていただけたのかな？と。当日参加していた支援者の方から、予約制になったのでハードルが上がり来られなくなった当事者がいる、という声もあつたので…。

これからプラットフォームづくりに取り組む自治体にメッセージをお願いします。

池知：高松市の場合は、オリーブの会さんやNPOさんともつながりが大きいと思います。行政だけでなくできることは徹々たるもの。民間の方はネットワーク軽く動いて、当事者やご家族との距離も近い。この事業の趣旨である行政と民間でつくっていくプラットフォームは本当に必要だと思います。

香川県高松市・多度津町・まんのう町 関係者インタビュー

vol.2



須藤江利子さん

香川県健康福祉部障害福祉課精神保健・人材育成グループ所属。主に精神障害のある人たちが地域で暮らしていくために支援者の理解を深める、地域の理解を仰ぐなど人材育成に携わる。ひきこもり支援事業もひきこもり地域支援センターと共に担当している。

今回、県に関わった意義はどのようなことだったと思いますか？

須藤さん(以下敬称略)：香川県では平成23年にひきこもり地域支援センターを開設し、高松市を含む保健所と協力して支援事業を実施してきた経緯があります。財源的・人材的に市町と県が連携する方がお互いに連携しやすいと考えています。また、現状を知られたくない当事者やご家族が地元の窓口の利用

をためらう等の声は聞いていたので、県内全域で利用できる支援を提供することに大きな意味があると思います。

事業を通して学びや気づきはありましたか？

須藤：当事者の居場所の運営には適切な配慮があるのでということ、制にしない」とか、「休める場所をつくっておく」、「当日参加者のきめ細

かなフォロー」など。役割分担と場づくりの洗練された運営を、香川の関係者と一緒に体験できたのは大きな収穫でした。

難しかったところや反省点はありますか？

須藤：今回、Aグループ(p.10)・11参照)のコアメンバーとは常に方向性や情報を共有できましたが、Bグループの協力関係機関との調整が万全とさえ、温度差があつたかなと思います。本来はU×会議さんとの初回の協議の場からキーとなる職員が参加し、スタートから方向性を一致させる必要がありました。コロナ禍で保健所の業務の負担増やこの事業の時間的な制約の中で皆さんの調整が思うようにいかず、地域のキーとなる人を巻き込めなかつたことが反省点です。それから、コロナでやむを得ずU×ラウンジが延期、予約制になつたことで参加いただけなかつた方がいたことが残念です。今後、事前予約な

しのU×ラウンジをやってみたいです。

須藤さんは、民間団体への信頼感をお持ちであるように感じますが、連携についてはどのようにお考えですか？

須藤：平成26年度からひきこもりサポーター※養成研修をKHJ香川県オリーブの会さん(p.70参照)に委託し、令和元年度からはNPO法人さん(p.76参照)にバトンタッチしています。また、NPOさんやひきこもり地域支援センターとは定期的な情報交換会で相談・協力しながら事業を実施できています。漠然とでも「こんなのできたらいいよね」を自由に話し合うことから、多様なアイデアが生まれ、それを臨機応変に実行できる民間の力はとても心強いしありがたいです。当事者経験や家族の声、豊富な支援経験を活かせる民間の方の力があつてこそ、必要な支援ができるのだと思います。

香川県多度津町・まんのう町 | 関係団体紹介

case 5
香川県
多度津町
まんのう町

KHJ
香川県オリーブの会

ひきこもりの子をもつ親・家族の会。ひきこもり当事者とその親・家族に対して、当事者の自立、家族同士の連携に関する事業を行う。

香川県
健康福祉課
障害福祉課

一般社団法人
hito.toco

不登校・ひきこもり等の相談窓口・居場所・就労支援・家族会などを行っている。

ひきこもり経験者
(個人)

まんのう町
健康増進課

多度津町
健康福祉課福祉係

香川県高松市・多度津町・まんのう町
関係者インタビュー

vol.3



松本一幸さん



平野明子さん

KHJ香川県オリーブの会共同代表。ひきこもりの子を持つ親(家族)の会として2002年に設立。高松市を中心に、月例会や居場所運営、相談・訪問、学習会などを通じて当事者やその家族の自立や連携を支援している。

——これまでどんな活動をされてきたのですか？

松本さん(以下敬称略)：KHJは全国ほとんどの都道府県にある、ひきこもり当事者をもつ家族のネットワークです。オリーブの会は、2002年から活動を始め、現在42家族が会員になっています。月1回家族会の集会、隔月のオリーブ通信(会報)の発行、居場所の運営もしています。

——お2人はいつから関わっているのですか？

平野さん(以下敬称略)：初期から関わっています。2003年ぐらいから。
松本：私は2005年ごろです。妻がインターネットでオリーブの会を見つけて、月例会に恐る恐る行ったのが最初です。

——今回の事業の、これまでと比べて新しくなった部分は？

平野：最初は、この場に來られるような元気な当事者はそんなに多くないかなと思います、若干消極的な参画の仕方でした。実際、イベントに出て來られる人はやはり一部だろうとは思いますが、Uxラウンジ後にお会いした当事者さんの一人がUxラウンジをきっかけに変わられたということがあり、それが驚きでした。それまで発言が少ない人だったので、自分からの発言が増えて積極的になられた印象がありました。

——ほかにも何か収穫はありましたか？

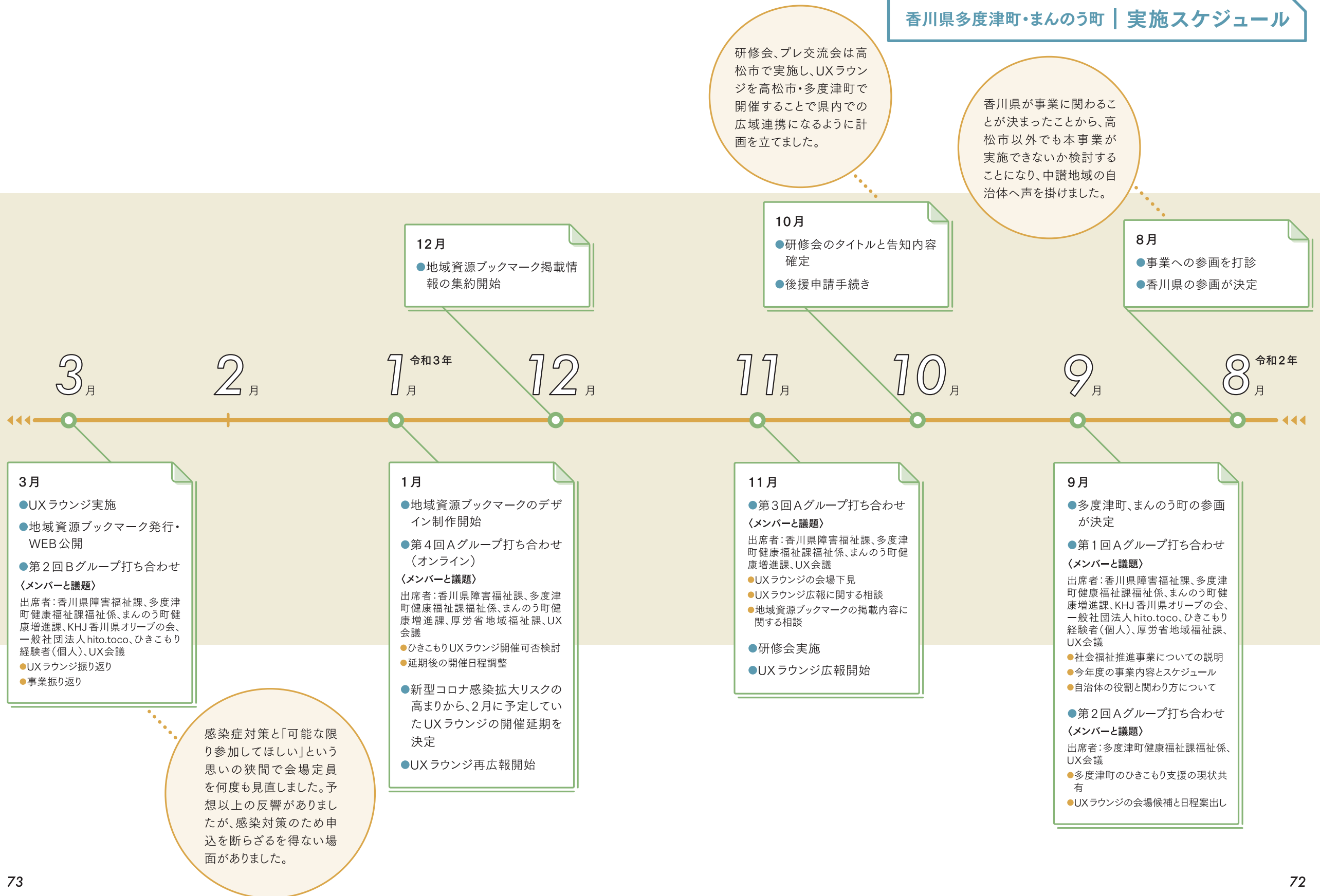
平野：多度津のラウンジに多度津町の方が参加されていなかったことに現れているように、地元の人には地元の相談機関や居場所には行きにくい。ひきこもりの支援は広域で行う必要があるということが、

厚労省や行政に伝えていただけたことはよかったですと思います。

松本：私たちは、大人数を集めようとしたら、講演者をネームバリューのある方にして…というような考え方だったので、今回主催されたUx会議の5名の方は、それぞれのこれまでの経験やキャラクター・持ち味を生かして全体的なプログラムをつくられていて、それがすごくいいなあと思いました。

平野：今後、家族会で関わっている外とつながれない当事者をどうつなげていけばいいかという課題が残っています。また、近年、メディアでもよく取り上げられるようになり、当事者の中にもさまざまな力をつけてこられている方が増えていると思います。家族会の立場としては、当事者の目線から、家族の方に焦点をあてたアドバイスがもらえるような取り組みがあればいいなと思います。

香川県多度津町・まんのう町 | 実施スケジュール



香川県多度津町・まんのう町 関係者インタビュー

vol.1



津島知彦さん

多度津町健康福祉課福祉係所属。町内のひきこもり支援に力を入れていきたいと考え、令和2年度から民間団体や事業者にも声をかけて多度津町でのネットワーク構築に着手している。

——この事業が始まった経緯は？

津島さん(以下敬称略)：県と一緒に取り組んでいこうという流れはあり、多度津でもできることからやっつけていこうという意識はありました。令和2年度から、ひきこもり支援に賛同していただいた複数の団体と一緒に町内でひきこもり支援のつながりづくりがスタートしています。今回、香川県の障害福祉課からお話をいただいた、町内でのひきこもり支援の

きつけづくりになれば、と思って参画することを決めました。

——不安なところはなかったですか？

津島：当事者会というイベントをしたことがなかったので、イメージが湧かず、それが不安でした。本当に当事者の方って来るの？ 来なかったらどうするの？ どんな人が来るのか想像がつかない中で、どんなことに配慮しながら、どう携われればいいの？ というような。

——実際やってみていかがでしたか？

津島：すべてが新鮮でした。こういうふうにするのかと。本当にこんなに大勢の参加者が来ると思ってなかったの、ご家族やご本人もたくさんお見えになられたことにびっくりしました。「こんなにいるんだ」と。ひきこもりの人たちは出てこれないんでしょ」という一般的なイメージを変えていくことや、多様性について理解を深める啓発が必要だなと感じます。

——多度津町の当事者の方が参加されなかったことについてはどう捉えていますか？

津島：多度津町以外の自治体でやれば、多度津の人も行けるんだらうと思います。やはり、近所の人や顔見知りと会ってしまうのではないかと不安感があったのかな。匿名性が担保され、安心して参加できる規模やエリアあってどれぐらいかなと考えると、香川県ではかなりの広域化が必要ではないかと思っています。

——今回の事業でできたつながりや学びは今後活用できそうですか？

津島：UXラウンジでの、あのやりわらいフランクな雰囲気づくりは自分たちだけでは難しいという思いは、正直あります。当事者経験のあるUX会議の皆さんがその場にいる、ということも参加者にとっては心強んだらうな。行政が主催だと雰囲気堅くなってしまうし、今後、行政の立場で何ができるのかを、考えていきたいと思っています。

香川県多度津町・まんのう町 関係者インタビュー

vol.2



大森千夏さん

まんのう町健康増進課所属。保健師として主に町内の成人保健を担当。がん検診、新型コロナウイルス感染症対策関連、歯科検診、乳幼児検診、町内担当地区への訪問など幅広く受け持っている。平成28年度から町内で「ひきこもりサポーター事業」を始める。



正木地りさん

——まんのう町のひきこもり支援の現状は？

正木さん(以下敬称略)：福祉の担当係に専門職がないという事情もあり、うちの課が担当窓口となっています。地区担当制で保健師としての活動をしていると、ひきこもりの方の存在が見えてくることがあり、ひきこもり支援の必要性は感じていました。だから、今回の事業はぜひ参加させてもらいたいという気持ちで手を挙げました。小さな町で、少子高齢化も進んでいて避けては通れ

ない。数としても見えていないだけでもっといらっしやると思っています。

——今回は、どんなことをお二人は担ってくださったのですか？

大森さん(以下敬称略)：多度津町のUXラウンジと一緒に運営させてもらいました。それから、「地域資源ブックマーク」は、配布を頑張らせてもらいました。

——配布にあたっては、どんな工夫を？

正木：UXラウンジでご家族に言われてグサツと刺さったのは、役場に相

談なんて、絶対に行けない」という一言。「来ないね」「来にくいのかなあ」とは思っていたけれど、まさか「絶対に行けない」と言われる場所で、私たちは支援窓口をやっていたのかと…。「地域資源ブックマーク」にしても、行政の公的な場所に置いておくだけではダメだと思い、町内の21か所、薬局や図書館などにも趣旨を説明して、さりげなく手に取れるところに置いてほしいとお願いして回りました。

大森：町内に唯一心療内科があり、UXラウンジの案内と「地域資源ブックマーク」を置かせてもらいました。UXラウンジが終わってから、お礼を兼ねて配布に伺って、盛況だったと伝えたらすごく喜んでくださいました。

——ラウンジ当日はまんのう町の方も参加されたそうですか？

正木：多度津町で開催したからだと思います。やっぱり地元ではダメなんだと、それにも愕然としました。地元の人的一定数が役場で働いているうちのような町では「相談したい」よ

りも「知られたくない」が勝ってしまう。ひきこもりサポーター(P.69参照)も、「利用したいけれど、あなたはいいけど、申請書類を他の人が見るでしょう、だから利用できない」という方がいました。

大森：田舎だから、人の目がより気になるんですね。相談窓口の明確化は必要なのかもしれませんが、それだけではなく、もっといろんなところで情報がとれて、いろんなところからアクセスできることが必要であるというのを、改めて感じました。

正木：私たちにできることとしては、もう一つは啓発。もっと町内で、「誰にでも起こりうること」として、ひきこもりのことを分かってもらう必要があると思います。私自身、林さんのお話を聞かせてもらった時、「もう一人の自分がそこにいる」と思ったぐらい、特別なことじゃないと感じました。たくさんの人に理解が深まって「知られたくない」気持ちが薄まったらいいなと思います。

香川県高松市・多度津町・まんのう町
関係者インタビュー

vol.3



宮武将大さん

一般社団法人hito.toco代表理事。小学6年生で不登校になり、そのまま20歳までひきこもり生活を送る。自身の経験を活かし、障害のある方の就労移行支援、不登校・ひきこもりの方への居場所や家族会、相談支援等を行う。

——普段どんな活動をされているのですか？

宮武さん(以下敬称略)：僕自身、もともとひきこもり経験があつて、当事者活動からスタートしました。不登校やひきこもりの方のアウトリーチや相談、居場所づくりです。数年前から、障がいのある方やひきこもりの方の就労支援を始めました。今回は、事業連絡会に参加させていただいたのと、日頃相談に乗っている方へのリーチができればということ

で、広報もさせてもらいました。U Xラウンジ当日は僕以外に2名ひきこもり経験のあるスタッフがいたので、当事者会やつながる待合室の運営にも関わりました。

——本事業を始めるにあたって、はじめに香川県の職員の方とつないでくださったのも宮武さんでした。

宮武：去年(令和2年)の春にU X会議の林さんに研修会の講師をお願いしたんです。オンラインだったのですが、うちの事務所に県や市の方

が集まって実施しました。終了後に、県や市の方を林さんに紹介したのですが、その時に林さんが「行政と民間の仲が良さそうだな」と感じたようで、この事業にも声をかけてくださったようです。林さんから「市と県どっちから声かけたらいいと思っう？」と相談され、「まずは県がいいと思う」とお伝えしました。その後、県の須藤さん(p.69参照)がすごくいい動きをしてくれたので、よかったです。

——普段から行政と連携してきたのですか？

宮武：ひきこもりサポーター養成研修の運営でかなり密接にやりとりをしていて、連携しやすくなつていたと思います。行政の枠におさめられないところはhito.tocoがやってくれる、と思つてもらえているようには思っています。県の須藤さんと高松市の池知さん(p.68参照)の「行政っぽくなくさ」は大きいですね。あれだけ理解してくれて、思いを持って事業に参画してくれる行政の方は僕もあま

り出会ったことがないです。その中に、今回U X会議さんが入ってきてくれたので、スピード感を持って動けたかと思えます。多度津町・まんのう町とも、今回で仲間意識が強まつたし、今後につなげていきたいですね。

——今回の成果と今後の課題は？

宮武：自治体の垣根を超えて、何か1つのことに取り組むというのは僕もこれまであまりなかったもので、今回同じ経験が共有できて同じ知識を得られたことは、行政の知識や思い、レベルを上げるものになると思います。課題としては、「いろんな当事者の人の声を聞けてよかった」「こういう場をやるのが大切」と行政の人たちが言ってくれますが、もうそろそろ「出会えていない」「声を聞けていない」ということの、その先に行きたいです。今回せっかく自治体とつながったので、僕らも自治体を巻き込んで提案していけるようになれたいいなと思つています。行政の人は異動してしまうので、絶対に民間の存在が必要だと思います。

